「入所施設でコロナと向き合う」
～利用者の大切な日常生活を守るために～

チームで乗り越えた 39 日間と、これからの支援

社会福祉法人奈良県手をつなぐ育成会
理事長　山岡　亨

まず初めに、この度の当法人施設における新型コロナウイルス感染症集団発生において、利用者およびそのご家族、関係機関の皆様方に多大なるご不安とご迷惑をおかけしたことを、心よりお詫び申し上げます。

さて、今回このような機会を頂戴いたしましたので、稚拙な文章になりますが、法人が経験したことや今後の課題について述べたいと思います。

当法人においては、第３波の到来に対し職員及びその家族の健康状態の把握、利用者の活動制限、手指・設備消毒等、衛生管理レベルを上げ、できる限りの対策を講じていました。

しかし、利用者との距離が近くなる食事や排せつ介助、マスクができない利用者、集団生活、入所・通所混合型の小グループ支援等、さまざまな要素が絡み合い、感染拡大を防ぐことができませんでした。

そして、「もう大丈夫だろう」と、事業再開の為に実施した検査でも陽性者が出た時や、10 日間の療養期間が終了した利用者が再び発熱し、「再発の可能性がある」と言われた時には、やっと見え始めた出口のかすかな光がかき消されたようで、心身共に闇に飲み込まれそうになりました。

しかし、このような状況においても、職員は誰一人として現場を離れることなく、利用者への支援を続けてくれました。普段とは違う生活環境の中で、混乱し昼夜逆転する利用者や、発症により体調不良になる利用者に対してすぐに対応できるように、防護服やゴーグル、マスクを着用したまま、廊下で仮眠をとる職員もいました。

また、自らの体調不良を訴えることが難しい利用者を支援する中で、「もしも自分(職員)が気付くのに遅れ、重症化したらどう責任をとればいいのか？」という不安を常に抱えていました。職員の中には、自らが感染した場合のことを考え、期間中は家族と離れた場所で生活をするなど、自らの生活も制限している職員もいました。

防護服を着て口腔ケアを行うスタッフ

家庭の事情や自らの体調面から、利用者への直接支援に関わることができない職員も、各職員が今自分にできることを考え、この難局を何とか乗り越えようと取り組んでくれました。

陽性反応がでた利用者の施設内療養においては、施設環境が概ね 10 人１ユニットの小舎制であったため、陽性者と濃厚接触者、陰性者とのゾーニングは無理なく実施することができました。

しかし、陰性が何度も確認されている利用者の生活も、療養している利用者と同様に制限されていました。制限が多い中での生活でしたが、感染対策の中でも利用者ができる限り楽しめるようなプログラムを職員が考え提供していました。

今回、施設内療養が開始されると同時に、通所事業を休止しました。しかし、いつもと違う状況の中で、昼夜逆転やパニック等、大きく混乱する利用者もいました。混乱する利用者を車に乗せ、寝不足でいつか事故を起こすかもしれない恐怖を抱えながら、事業再開まで自宅での生活を支えてくれた家族や、同居する利用者が PCR 検査の対象となったことで、自宅待機となることが続き、このままでは会社に迷惑がかかることから退職を考えた家族もいました。

日に日に利用者と職員の疲労が蓄積される中で、最初の感染者が判明してから終息宣言が出されるまでの間、多くの方々からのご支援を頂きました。人員の確保においては、県担当課が調整役となり、県内の社会福祉法人等から６名の方が利用者支援に来ていただき、多くの職員が感染し人員不足になって休むことができなかった職員の休息を確保することができました。

こちらも口腔ケアの場面。
感染対策をして日々のケアに当たっています。

そして、県と保健所等が連携し、陽性者の健康観察やオンライン診療、感染防止のための備品の提供等をしていただいたことは、物質的な面だけでなく、共に感染症と戦ってくれている人がいるという精神面での大きな安心につながっていました。

情報共有のために設置した敷地内等の数カ所のホワイトボードに貼りだされた利用者家族や、育成会、関係者からの心温まる応援メッセージは、なかなか終わりが見えない毎日の中で疲れ果てていた職員の心の支えとなっていました。

令和２年 12 月末から始まった施設内療養も、２月４日に終息宣言が出されました。ただ、すぐに元の活動に戻ることは、感染防止対策上難しく、原則として入所者と通所者の活動スペースを分けることとなりました。万が一再び感染が判明した場合に最小限に感染拡大を抑える体制で活動を行っています。職員にとっては、利用者ニーズを中心として行ってきた活動を中止し、感染対策を優先した活動の中で利用者支援を行わなければならないもどかしさを感じています。

現時点における支援課題は、十分な感染対策の中でどのように利用者ニーズを実現していくかです。マスクができない、消毒等の衛生面の保持が難しい利用者でも、何らかの形で地域の人と関わりながら、人生を豊かにする活動を考えていかなければならないと考えています。

また、今まで以上に職員の体調管理、外来者の健康状態の把握等を徹底し、絶対に利用者に感染させないように感染対策に取り組んでいます。そして、法人組織に危機管理委員会を設置し、職員の危機管理意識の向上に努めてまいりたいと思います。

最後になりましたが、集団発生後の今日において法人が存続できているのも、多くの制限の中で施設内療養に対してご理解いただいた利用者やその家族、事業休止中にご自宅で利用者を支えていただいたご家族、「利用者の命を守る」使命感のもとに懸命に支援を続けてくれた職員とその家族、心の支えとなっていただいた育成会をはじめとする関係者、皆様のお陰です。心より厚く御礼申し上げます。

今後も、頂いた温かい支援へのご恩返しと共に、少しずつでも地域の皆様のお役に立つことができる法人になれるよう、職員と共に頑張ってまいりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

「社会福祉法人奈良県手をつなぐ育成会」は、現在の一般社団法人奈良県手をつなぐ育成会の会員を中心とした、知的に障がいのある方やその家族の篤い想いと、10 年以上におよぶ障害者に対する偏見や無理解との闘いの末に設立されました。 平成 15 年 入所更生施設『やすらぎの丘』、通所授産施設『たかとりワークス』を開設しました。入所施設の居住環境は概ね 10 人 1 ユニットの小舎制となっており、現在は入所の方が 47 名、通所の方が 39 名利用されています。私たちの法人は、どんなに障がいが重度であっても、法人としてできうる限りのことをすることをモットーに活動を展開してきています。これからもこの方針は変わりません。 私たちの法人は、障がいのある人やそのご家族、支援する職員、地域の皆様の共有財産だと思っています。